学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究*

—第一報告—

島根大学教育学部

小 川 一 夫**

I 序

多くの教育心理学書をひもとく時、われわれのまず気付くことは、教育の性格が極めて複雑多様であることにもよるであろうが、その取扱う研究領域に一致がみとめられないということである。しかしながら、ようやく教育心理学が心理学における一つの有力な部門として研究がおし進められるにともない、注目すべき傾向として、「教師の心理」が「教科の心理」と共に次第に大きな領域を占めつつあることを指摘できるのではなかろうか。

従来の教育心理学的研究の多くが、とかく児童・生徒のみを対象とする方向へ偏っているきらいがあるが、教育は教師と児童・生徒との間の関係を無視して成立しないことを忘れてはならない。早くからこの観点に立つて、Tumlirz, O. (1) が教育心理学の主要課題を「教師と生徒との間に成立する心的解明以外にあり得ない」とかつ破していることや、玉岡忍氏(2)が「教育心理学においては往々にして児童心理や教育方法のみが取上げられて教師自らの心理がおろそかにされ勝ちであるが、もつての外のこと、教師自らの心理の解明なくして児童の心理も教育方法も解明できない筈である」という強い見解のもとに、教育心理学の第一の問題はいわば教師の心理であると論じている点などは極めて示唆的であると思う。

勿論こうした教師の問題を重視し、これが究明に貢献してきた多くの研究があるにはあるが、沢田慶輔氏(3)も述べている如く、「それらが「主としてスタティクな研究の段階に停滞している」ことはなお大いに反省を要することであつて、「教師対生徒の相互作用についての心理学的研究をなすことは教師の心理についての研究においてもつとも中心的な課題」でなければならない筈であ

る。これに関しては、Lewin, K. や Lippitt, R. (4) らによつてなされてきた集団力学的研究がかなり大きい誘導的役割を演じたと考えるのであるが、我が国においても最近に到つて教師と児童・生徒の相互作用を直接把えることを目的とする小林さえ子氏(5)や小室庄八氏(6)や三宅和夫氏(7)らの研究が、次々と発表されつつあることは、今後の教育心理学に新しい重要な領域を確立するものであろう。

II 問 題

私もまた、教育の場での教師と児童・生徒の人間関係の究明こそ教育心理学の中心的課題でなければならぬと考え、その力動的関係の解明を志向するものであるが、本研究においてはその前段階として、まず現実の教師と児童の関係が学級で如何なる状態にあるかの問題解決を直接の目的とした。この点では従つて、依然としてスタティクな段階に停滞しているとのそしりをまぬがれないかも知れないが、かかる調査の今後の発展のしかた次第では両者の力動的な関係を客観的に捕捉することも可能であると考えている。

即ち具体的には、第一の問題として、教師は自分の担任学級の社会構造をどの程度正しく観察しているだろうかを取上げ、第二の問題に、もし教師の日頃の観察が間違っている場合、如何なる児童が教師に見誤られるのだろうかを想定した。そして以上の問題の解明を通じ、学級の社会構造に対する教師の態度を究明せんとするものである。ただし、内容の関係上、今回の報告ではそのうち第一の問題の解明についてのみ叙述することとし、第二の問題に関しては、後日第二報告にゆずりたいと思う。

III 研究方法

1 対 象

島根県松江市N小学校、15学級（教師15名、児童574名）

* A Study of the Teachers' Attitudes towards the Classroom Social Structure of Children (No. 1)
本研究は昭和29年度日本教育大学協会研究助成金による研究である。

** by Ogawa, Kazuo (Shimane University)

この対象校は市の周辺部に位置し、地域の職業構成は半ば勤め人、半ば農業の状態である。担任教師の性別、担任期間別、学級児童数などの内訳は Table 1 に示す。

なお、この被調査者は便宜的実証的な理由で選択したので、厳密な意味における無作為標本選択の理論に基づいたものではない。従つて、推計学的検定をこの調査結果に適用することは理論的に不可能であるが、この研究においては、もしもこれらの被調査者が、無作為に抽出された標本と見なすことができればという仮定のもとに、検定をおこなつたものである。

Table 1 被調査者

学 級	担任者性別		担任期間		被 調 査 児 童 数
	男	女	1年7月	7 月	
1 の 1		○		○	39
1 の 2		○		○	39
2 の 1		○		○	37
2 の 2		○	○		33
2 の 3		○		○	38
3 の 1		○	○		38
3 の 2	○			○	33
4 の 1		○	○		43
4 の 2	○			○	41
5 の 1	○		○		40
5 の 2	○			○	38
5 の 3	○		○		37
6 の 1	○		○		39
6 の 2	○		○		41
6 の 3	○		○		38

2 調査時期

昭和29年11月上旬

3 調査方法

まず 15 名の学級担任教師に、日頃の児童観察に基づいて、担任学級における人気者、排斥されている者、及び孤立児を、その該当理由をも附記してあげてもらつた。この場合、教師の列举する児童数には制限を加えず、各教師の判断にまかせた。なお調査票の教示の主要部分は次の通りである。

- (i) 多くの児童から愛好されている所謂人気者は誰々ですか。又何故愛好されているのか、その主な理由

をもそれぞれ記して下さい。

- (ii) その反対に、皆から嫌われ、排斥されているのは誰々ですか。又何故排斥されているのか、その主な理由をそれぞれ記して下さい。

- (iii) 仲間はずれで孤立している児童は誰々ですか。又何故孤立しているのか、その主な理由を記して下さい。

又担任教師に対する如上の調査とは別に、1年～6年の各学級の児童に Sociometry による交友関係の調査⁽⁸⁾を実施した*。これには積極的選択(好きな友人をあげさせるもの)と拒否的選択(嫌いな友人をあげさせるもの)とが含まれていて、好きあるいは嫌いの順に番号を附してあげさせ、又それぞれの理由を名前の下に書かせ、列举する友人の数には別に制限を加えなかつた点では両者同じであるが、前者は記名調査で実施したのに対し、後者は無記名調査で行い、誰が書いたのかわからないのだと教示して、妥当性を高めると共に、嫌いな友人を相互に指摘することによつて予想される教育的弊害を未然に防ぐ配慮を行つた。

4 整理方法

教師の普段の観察による評価と児童の Sociometry の結果とがどの程度一致するかをみようとする場合、教師の列举した児童に対して Sociometry の結果をどのように整理し、どの程度をもつて人気者、排斥されている者、孤立児と見なすべきかについてはかなり問題であろう。この研究にあつては、一応便宜的ではあるが、次の如き整理方法を採用することにした。

(1) グループ社会距離粗点

積極的・拒否的選択のそれぞれの場合において、第一位にあげられた時5点、第二位の時4点、第三位の時3点、第四位の時2点、第五位以下の時1点として、各人のグループ社会距離粗点を算出した。

(2) グループ社会距離指数

Table 1 でわかるように、各学級の児童数は必ずしも同じでないで、これを齊一にする意味において、各学級ごとに可能な最高グループ社会距離粗点に対する積極的・拒否的両グループ社会距離粗点の百分率を求め、各人のグループ社会距離指数とした。即ち公式としては

$$I = \frac{G \times 100}{5(N-1)} \quad \text{となる。}$$

(3) 人気児童

かくして求められた積極的グループ社会距離指数 20 以上をもつてその学級の人気児童とした。ただしこの規

* 低学年では特に時間をかけ、質問紙によるのが無理な場合には面接法をも併用した。

準の設定には一応の理由*はあるにしても、あくまで便宜的であることを考慮して、教師の人気者としてあげた児童の中に指数 15~20 の者が含まれている場合には、その学級の人気児童についてのみ当該指数以上をもつて人気児童と認める方法を用いた**。

(4) 排斥されている児童

拒否的グループ社会距離指数 20 以上をもつて排斥されている児童としたが、人気児童の決定の際と同様に、教師のあげた児童中に指数 15~20 の者がいる場合、その学級のみ規準を下げて排斥児童を抽出した***。

(5) 孤立児童

積極的選択においても、拒否的選択にあつても共にあまり級友によつて指名されない児童として、操作的には積極的グループ社会距離指数と拒否的グループ社会距離指数の和が 2 以下の者をもつて孤立児と決めた。ただしこの場合も、教師のあげた孤立児の中に当該指数 4 以下の者が含まれておれば、その学級のみその指数以下をもつて孤立児とみなすよう規準に変更を加えた****。

IV 結果および考察

1 Sociometry の信頼度

教師が学級の社会構造をどの程度正しく観察しているかの問題解明の方法として、教師の日頃の観察的評価を児童に課した Sociometry の結果と直接比較して考察して行く以上、当然 Sociometry の信頼度をまず検討しておかねばならないであろう。というのも低学年にあつては Sociometry の信頼度が低いといわれている(9)からである。

第一回の児童に対する Sociometry を 11 月上旬実施した後一ヶ月をおいて同様の方法で二回目を、更に一ヶ月を経過して第三回目を念のため実施したので、その間の信頼度係数を 1 年、2 年及び 6 年の一部について求めると Table 2 に示す如く、一ヶ月の期間をおいた Sociometry の結果には高学年は勿論のこと、低学年にあつても極めて高い信頼度がうかがえる。従つて一応 Sociometry の結果が学級の社会構造を示すものと解し、教師の観察的評価との比較考察を進めることにするが、實際

には教師に対する調査とほぼ同時期に実施した第一回目の Sociometry の結果をここでは用いて行きたい。

Table 2 Sociometry の信頼度

学 級	選 択	r_{12}	r_{23}
1 の 1	積極的	0.943	0.829
	拒否的	0.903	0.921
1 の 2	積極的	0.891	0.933
	拒否的	0.796	0.702
2 の 1	積極的	0.849	0.896
	拒否的	0.831	0.958
6 の 1	積極的	0.942	0.922
	拒否的	0.911	0.894
6 の 2	積極的	0.904	0.955
	拒否的	0.955	0.953

2 教師評価と児童調査の一致度

教師のあげた児童のうち、どれだけが Sociometry の結果と一致するかを考察する場合、全学級を一括した整理法は必ずしも好ましくない。というのは、学級の個性を無視できないと思うからである。教師に課した調査において、列挙する人数を制限しなかつた理由もそこにある。結果的にも学級により、教師によりあげられた人数はまちまちで、Table 3 の教師評価児童数をみればわかる通りである。同様に、児童に課した Sociometry の結果としてあがつてくる該当児童数も学級によつて異なっていることが知られる。Sociometry の整理法如何によつて後者の数に変動が起ることはいうまでもないことであるが、一応ここで採用してきた整理の結果では、教師のあげた児童数の平均が人気児童において 4.0 人、排斥児童において 3.3 人、孤立児童において 1.8 人であり、他方 Sociometry の結果ではそれぞれ平均 4.7 人、4.8 人、2.8 人となつた。全体的には従つて教師の挙げた者よりも Sociometry で該当児としてあがつてくる者の方がやや多いということになるが、各学級の個性を考えて、両者の比較も各学級ごとにまとめ、教師の個人差をも検討しうる立場をとつた。Table 3 にそれぞれの教師の一致度を示してある。

(1) 全員について

平均一致度をみると、人気児童 65.5%、排斥児童 39.2%、孤立児童 2.9% となり、人気児童についてはかなり教師の観察が正しいが、孤立児童にあつてはほとんど誤っていることがわかる。このように三群間の平均一致度

* 資料を通覧した場合、グループ社会距離指数の分布状況からして、大体指数 20 の辺で明瞭な段階区分がつく。排斥児及び孤立児でもそれぞれ決定の規準で同様のことがいえる。

** これに該当した学級数 4、最低は 6 の 1 における指数 15.3

*** これに該当した学級数 8、最低は 4 の 1 における指数 15.0

**** これに該当した学級数 1、指数は 6 の 1 の 3.1

Table 3 教師評価と児童調査の比較(%)

群 学級	人 気 児 童					排 斥 児 童					孤 立 児 童				
	教 師 列 挙 数	調 査 該 当 数	一 致 度	ずれの度		教 師 列 挙 数	調 査 該 当 数	一 致 度	ずれの度		教 師 列 挙 数	調 査 該 当 数	一 致 度	ずれの度	
				積極的 過 誤	消極的 過 誤				積極的 過 誤	消極的 過 誤				積極的 過 誤	消極的 過 誤
1 の 1	4	4	60	20	20	4	4	60	20	20	3	4	0	43	57
1 の 2	4	3	75	25	0	5	4	50	33	17	0	3	0	0	100
2 の 1	2	5	40	0	60	3	6	50	0	50	2	3	0	40	60
2 の 2	4	5	80	0	20	0	5	0	0	100	1	2	0	33	67
2 の 3	4	9	44	0	56	2	5	40	0	60	—	—	—	—	—
3 の 1	6	4	67	33	0	6	6	33	33.5	33.5	2	4	0	33	67
3 の 2	8	8	45	27.5	27.5	4	9	44	0	56	3	0	0	100	0
4 の 1	2	2	100	0	0	1	6	17	0	83	1	9	11	0	89
4 の 2	3	4	75	0	25	5	6	38	25	37	3	3	0	50	50
5 の 1	4	6	43	14	43	1	3	33	0	67	1	2	0	33	67
5 の 2	2	2	100	0	0	2	2	33	33.5	33.5	2	2	0	50	50
5 の 3	3	3	100	0	0	2	5	40	0	60	1	0	0	100	0
6 の 1	8	8	78	11	11	6	2	33	67	0	3	6	29	14	57
6 の 2	2	3	25	25	50	6	5	57	29	14	4	3	0	57	43
6 の 3	4	5	50	17	33	4	4	60	20	20	1	1	0	50	50
平 均	4.0	4.7	65.5	11.5	23.0	3.3	4.8	39.2	17.4	43.4	1.8	2.8	2.9	43.1	54.0
				34.5					60.8					97.1	

※ 2の3に於て孤立児童の資料の欠くのは、教師の応答を得られなかったためである。

が、教師の個人差を無視してどの教師においてもいえるかどうかを分散分析法*で検すると Table 4 に示すような結果が得られた。即ち、教師の評価と児童調査の一致度は人気児童について最も高く、次いで排斥児童、最も低いのが孤立群であるといえる**。

又常識的には、教師の個人差が予想されたのではあるが、検定の結果からは教師の個人差が偶然誤差の範囲内で、評価に及ぼす影響は一般に認められない。

* 特殊な場合の分散分析法であるので、%を角度になおして、即ち $\text{angle} = \arcsin \sqrt{\%}$ として検定にかける。(岩原信九郎：教育のための推計学，p.287)

** 人気児童の平均一致度 65.5% と排斥児童の 39.2% の差， $t = 3.52$

排斥児童の平均一致度 39.2% と孤立児童の 2.9% の差， $t = 5.60$

共に $df. = 27$ ，危険率 1% 以下で有意差あり。

Table 4 三群間平均一致度の差の検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	21192.42	2	10596.21	44.05**
個 人 間	2269.94	14	162.14	0.67
群内(誤差)	6495.06	27	240.56	
全 体	29957.42	43		

** 有意な差あり (P=0.01)

(2) 性別について

次に教師の性別によつて一致の度合が異なるかどうかをみると、Table 5 の性別平均一致度において推察される如く、別に検定にかけるまでもなく教師の性別が評価に及ぼす影響はないといえる。

Table 5 性別平均一致度 (%)

教師 群	男 (8)	女 (7)
人気児童	64.5	66.6
排斥児童	42.3	35.7
孤立児童	3.6	1.8

(3) 担任期間別について

更に、教師の担任期間別についてみると二群に区別され、8名の教師は前学年度より引続きその学級を担任しているのであるが、他の7名の教師は本年度4月よりその学級を担任している。常識的に考えても、学級の担任期間が長い程児童観察がよくなされるものと思われるのであるが、Table 6 の担任期間別平均一致度をみると、検定にかけざるまでもなく担任期間の長い教師の評価の方がより妥当的であるとはいえないようである。孤立児童については、7月担任の教師の一致度が0%であるのに対し、1年7月担任の教師にあつては一致度5%で、長期担任の場合ややよく観察されている傾向をうかがいうるが、排斥児童に関しては、むしろ逆の傾向さえあらわれている。

Table 6 担任期間別平均一致度 (%)

教師 群	1年7月 (8)	7月 (7)
人気児童	67.9	62.7
排斥児童	34.1	45.0
孤立児童	5.0	0.0

3 教師評価と児童調査のずれ

すでに前項において、教師の観察と児童調査との一致度は人気児童で最も高く、孤立児童について最も低いことが考察された。裏をかえしていえば、孤立児童に関して教師の評価と Sociometry のずれが最も大きく、次いで排斥児童であり、人気児童においては最もずれが小さいことになる。従つてここでは各群内における教師の見誤りについて分析考察したい。即ち見誤りにも二種類のものが考えられるからである。一つは教師が該当児童として列挙したにも拘らず、Sociometry の結果では該当しない場合の所謂積極的過誤 (教師の見すぎ) であり、一つは教師が該当児童として挙げないけれども、児童調査の結果からは該当児童として挙つてくる所謂消極的過誤 (教師の見落し) である。教師の見誤りについてのこの二つが如何なる関係にあるかを各群について考察しよう。

(1) 全員について

先ず全員について、積極的過誤と消極的過誤の各群に

おける関係をみると Table 7 に示す如くである。人気児童では検定の結果 (Table 8) 何ら有意の差は認められないが、排斥児童に関しては5%の有意水準で、積極的過誤より消極的過誤の多いこと、換言すれば教師の見落しの多いことがいえる (Table 9)。更に孤立児童についていえば、分析にかけざるまでもなく上述の結果から推定して、積極的過誤と消極的過誤の間には何ら有意な差異はないものと考えてよからう。

Table 7 全員及び性別平均ずれの度 (%)

教師 群	全 員		男 教 師		女 教 師	
	積極的	消極的	積極的	消極的	積極的	消極的
人気児童	11.5	23.0	11.8	23.7	11.1	22.3
排斥児童	17.4	43.4	21.8	35.9	12.4	51.9
孤立児童	43.1	54.0	56.8	39.6	21.3	65.9

Table 8 人気児童における積極的過誤と消極的過誤の差の検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	611.55	1	611.55	2.10
個 人 間	4092.95	14	292.35	1.01
群内(誤差)	4069.53	14	290.68	
全 体	8774.03	29		

Table 9 排斥児童における積極的過誤と消極的過誤の差の検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	3780.69	1	3780.69	5.11 *
個 人 間	957.84	14	68.42	0.09
群内(誤差)	10347.02	14	739.07	
全 体	15085.55	29		

* 有意な差あり (P=0.05)

(2) 性別について

ついで、男教師と女教師の間に見誤りのあらわれ方のちがいがうかがえるかどうかを分析してみると、性別のずれの度は Table 7 に示す通りで、概して女教師の方が男教師に比べ消極的過誤が多いようである。検定の結果、人気児童では格別の差は認められないし、排斥児童についても男教師・女教師共に見すぎと見落しの間に有意差はみられない (Table 10, Table 11)。即ち排斥児童に関して先に述べた積極的過誤<消極的過誤の関係は、全員についてのみい切れるようである。

ところが孤立児童についてみると、男教師にあつては

Table 10 男教師の排斥児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	576.97	1	576.97	0.81
個 人 間	219.84	7	31.40	0.04
群内(誤差)	4987.01	7	712.43	
全 体	5783.82	15		

Table 11 女教師の排斥児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	4138.32	1	4138.32	5.61
個 人 間	686.96	6	114.49	0.15
群内(誤差)	4425.40	6	737.56	
全 体	9250.68	13		

Table 12 男教師の孤立児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	1244.85	1	1244.85	1.17
個 人 間	158.10	7	22.59	0.02
群内(誤差)	7450.54	7	1064.36	
全 体	8853.49	15		

Table 13 女教師の孤立児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	4030.40	1	4030.40	6.70*
個 人 間	156.49	5	31.30	0.05
群内(誤差)	3006.52	5	601.30	
全 体	7193.41	11		

* 有意な差あり (P=0.05)

別に有意差は認められない (Table 12) が、女教師では明らかに積極的過誤より消極的過誤が多いとみてよい (Table 13)。

このように、概して女教師が男教師に比べ見落しの誤りが多いということは、一般に考えられるような女性の遠慮がちな性格が該当児童を列举する際、どちらかといえば控え目に指摘する結果としてあらわれてきたものであろうと考えられる。各教師の該当児の列举数を教師の性別にまとめてみると、その平均が、人気児童で男教師4.3人に対して女教師3.7人、排斥児童で3.8人対2.7人、孤立児童では2.3人対1.3人となり、どの群についても女教師の方が児童を少くあげていることが認められる。ところが Sociometry の結果があがってくる該当児童の平均数を見ると、人気児童で男教師担任学級4.9人に

対し女教師担任学級4.6人、排斥児童で4.5人対5.1人孤立児童では2.1人対3.6人であつて、女教師の担任学級の該当者が男教師担任学級のそれより少いということではなく、むしろ孤立群では平均的に男教師の学級より多い傾向さえうかがえるのである。

(3) 担任期間別について

最後に、積極的過誤と消極的過誤の度合を担任期間別についてみると、Table 14 に示す如くであり、二つの見誤りの差の検定を人気児童の担任期間7月と、排斥児童の担任期間1年7月及び7月の三群について行つたものが Table 15, Table 16, Table 17 である。平均値

Table 14 担任期間別平均ずれの度 (%)

教師 過誤 群	1 年 7 月		7 月	
	積極的	消極的	積極的	消極的
人気児童	12.5	19.6	10.4	26.9
排斥児童	18.7	47.2	15.9	39.1
孤立児童	40.0	55.0	47.2	52.8

Table 15 7月担任教師の人気児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	703.18	1	703.18	1.59
個 人 間	1348.19	6	224.70	0.51
群内(誤差)	2658.86	6	443.14	
全 体	4710.23	13		

Table 16 1年7月担任教師の排斥児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	2396.35	1	2396.35	2.07
個 人 間	669.90	7	95.70	0.08
群内(誤差)	8117.89	7	1159.70	
全 体	11184.14	15		

Table 17 7月担任教師の排斥児童におけるずれの検定

変 動 因	平方和	自由度	不偏分散	F
群 間	1419.47	1	1419.47	3.98
個 人 間	286.39	6	47.73	0.13
群内(誤差)	2140.89	6	356.82	
全 体	3846.75	13		

の差の大きいものについて行つたこれらの分析から考察されるように、1年7月と7月というその学級の担任期間別のちがいは、人気児童、排斥児童、孤立児童のどの群においても積極的過誤と消極的過誤の間に有意な差異を惹起していないようである。

V 要 約

学級の担任教師が児童の社会構造をどの程度日頃の観察で把握しているだろうかという問題を、教師に対する調査と児童に対する Sociometry の比較から研究してきたのであるが、得られた結果を概括すると次の如くまとめられる。

(1) 教師は担任学級における人気児童として平均4名を、排斥されている児童として3.3名を、また孤立児童として1.8名をあげた。そしてこれを性別についてみれば、一般に女教師の該当児童を挙げる数が男教師に比し少い。

(2) 学級の児童に対して実施した Sociometry の結果からは、人気児童として平均4.7名が、排斥されている児童として4.8名が、また孤立児童としては2.8名が抽出された。

(3) Sociometry の信頼度に関しては、念のため1月の間隔において実施した3回のものの間で、1年生においても信頼度係数 0.70~0.94、8年生にあつては 0.90~0.95 というように、従来考えられているものより著しく高いものが見られた。

(4) 教師の観察による評価と Sociometry の結果とを比較してみると、人気児童については教師はかなり正しく観察しているが、孤立児童についてはほとんど一致が認められず、教師の著しい見誤りが起つている。排斥されている児童に関する教師の観察は人気児童程正しくないが、孤立児童程誤っていない。このように学級の孤立児童が学友から忘れられ勝ちであると同時に、教師からも見誤られ勝ちであるということは、Wickman, E. K. (10X11X12) 以来「教師が明瞭な非行や攻撃的な態度や学習の進展を阻止するおそれのある行動を重視し、従順な引込思案的・内閉的な態度や退行的な行動を軽視する」と強調されている傾向と軌を一にするものがあると思う。

(5) 教師の性別、あるいは担任期間のちがいによつて、児童観察の度合が異なるであろうと推測されるが、結果はそれに反しどの教師についても前項の傾向を明瞭にうかがうことができた。

(6) 教師は該当児童としてあげるにも拘らず、Sociometry の結果では非該当の積極的な誤りと、教師は

挙げないのに Sociometry の結果からは該当児童としてあがつてくる場合の消極的な誤りについてみると、群別では排斥されている児童において消極的過誤の多いことが認められた。又男教師と女教師を比べた場合、概して女教師の方に消極的過誤が多く、特に孤立児についてこの傾向が明白にうかがえる。これは女教師の性格に起因するものであろう。なおまた担任期間の長短が及ぼす影響はみられなかった。

VI 発展課題

この研究はなお引続き、どのような児童に教師の見誤りが生じやすいかの報告を残しておるものであるが、一応第一報告において取上げられた範囲内で、反省される主要な点を一括しておけば次の諸点があがる。

まず、Sociometry の結果を一応規準として教師の評価の正否を論じていることについては、Sociometry それ自体の信頼度に一応問題がないとしても、応答と実際の行動との関係（いわば測定の妥当性）について十分の吟味がなされてないことが反省される。Sociometry に加えるに、児童の社会構造を彼等の行動観察を通じて確める方法が講じられねばならない。

次に、教師の性別に関してであるが、男教師・女教師の区分の中には高学年と低学年の条件が混在していることを認めねばならない。しかし多くの小学校で低学年を女教師、高学年を男教師が担任している現状にかんがみ、このことの分析には困難がともなうと予測される。

また本研究にあつては、それぞれの群における各学級の該当児童数が少い関係から、敢えて分析しなかつたけれども、教師の性別によつて、男児と女児に対する態度の異なることが予想されるので、教師と児童の人間関係の究明に当つては、この面の分析的考察も今後の課題として残されていると考える。

文 献

- (1) 依田新：教育心理学の課題，理想，昭和24年2月，p. 33
- (2) 玉岡忍：教育心理学，昭和23年，p. 35
- (3) 沢田慶輔：教師の心理(二)，児童心理，第8巻，第4号，pp. 92~106
- (4) Lippitt, R. and White, R. K. : The "Social Climate" of Children's Groups. Child Behavior and Development, 1943, pp. 485~508
- (5) 小林さえ子：集団の指導法の問題，児童心理，第2巻，第2号，pp. 49~58
- (6) 小室庄八：児童の社会的行動に及ぼす学習指導

- 法の影響について, 教育心理学研究, 第2巻, 第4号
pp. 23~29
- (7) 三宅和夫, 奥山わか子: 幼児の社会的行動の発達に及ぼす成人(教師)の交渉の影響について, 教育心理学研究, 第3巻, 第2号, pp. 1~11
- (8) Moreno, J.L.: Who Shall Survive? 1934
- (9) 塩田芳久: ソシオメトリーの信頼度について, 児童心理, 第6巻, 第6号, pp. 61~68
- (10) Wickman, E.K.: Children's Behavior and Teachers' Attitudes. 1928
- (11) 沢田慶輔: 教師と生徒の心理 教育心理学講座 3 (学級の心理) pp. 198~203
- (12) 小川一夫: 児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究(第一報告), 島根大学論集(教育学関係) 第5号 昭和30年 pp. 1~19
-

A STUDY OF TEACHERS' ATTITUDE TOWARD THE SOCIAL STRUCTURE OF CLASSROOM (#1)

By Kazuo Ogawa
Shimane University

1. Subject

Purpose of this study is to analyze teacher's attitude toward children on the following two points:

- 1- How accurate is a teacher in his observation of the social structure of the class in his charge?
- 2- On what kind of children can his observation be wrong?

2. Method and Time

A primary school in Matsue City consisting of fifteen classes was chosen. The teachers were asked to cite those children whom they considered, based on their past observation, to be popular in class, boycotted by their classmates, or isolated. A sociometry was carried on the children at the same time. The study was made November, 1954.

3. Results and Interpretations

Following are the results obtained after comparing the study done on teachers and that on pupils:

- 1:- The teachers were fairly accurate in their observation of popular pupils. 65.5%
There is little agreement on isolated pupils. 2.9%
The boycotted ones come half-way between

the two, 39.2%

Through analysis of variance we could discern significant difference in the degree of agreement among the three groups.

This tendency is almost identical with the fact pointed out by Wickman — teachers are likely to make light of retiring attitude and regressive actions on the part of their pupils.

- 2:- It is remarkable that the above-mentioned relations can be discerned in every teacher, regardless of sex or length of the period in charge of the class.
- 3:- In analyzing the disagreement, in the case of boycotted children, we find that positive errors are greater than negative errors.
- 4:- Number of negative errors is greater in female teachers than male teachers. This is statistically significant in the case of isolated children.
- 5:- On the length of period in charge of class, we could hardly notice a significant difference between positive errors and negative errors.

SOME COMMENTS ON THE METHOD OF CLINICAL PSYCHOLOGY

By Shoshiro Kuromaru
*Psychiatric Clinic of Osaka City University
Medical School*

It is not long since clinical psychology became a popular subject of study in Japan. Therefore, studies on the method of diagnosing and treating the

patients have not been sufficiently made. The writer of this article wants to comment on methodology of clinical psychology.